



#003

ルノテオ・生徒会編

<http://luno.noor.jp>



レンは生徒会室に向かっていた。

サロンの時間ぴったりに生徒会室の扉を開けたが、赤井会長以外誰もいなかった。

「あれ……今日はサロンの日ですよ？」

「いや、今日はみんなには帰ってもらったんだ。君と二人きりで話がしたかったからね」

「えっ!？」

どうのことだろう……。

突然の言葉に、レンは動揺した。なんだか、頬が熱くなった気がする。

「君はもう、あの“紅茶倶楽部”には行ってないんだろ？」

「あ、はい。シュテルナーの活動を優先させてもらっているんで……それが何か？」

「まあ、確認するまでもないのだけど。君がシュテルナーにサインした時点で、あの部活は廃部だから」

「え、廃部って……どうのことですか？」

「一緒に様子を見に行くかい？ 紺野、臼井、お前らもついて来い」

どこに隠れていたのか紺野と臼井が現れる。全然二人きりじゃなかった……!?

四人は、赤井を先頭に紅茶倶楽部の部室である、温室へ向かう。

「紅茶倶楽部が廃部ってどうのことですか？」

「それは……あのシュテルナーの契約書に書いてあるよ。シュテルナーのメンバーになるには、他の課外活動には一切参加できない」

「えっ……てことは……」

「君は、シュテルナーになった時点で紅茶倶楽部のメンバーでなくなる。正式な部活は五名からだけど、三名でも仮申請は出来るんだ。あの部活はぎりぎり部員三人の仮申請でしのいでいたのさ。でも、君がいなくなってそれもできなくなった」

「そんな……」

別段愛着があった部活ではなかったけれど、レンは赤井の強引なやり方に少し疑問を感じた。

「さあ、あの白蛇が、どんな顔をしているか拝んでやろうじゃないか」

赤井は嫌な笑いを浮かべている。

部室には数名人が集まっているのが、ガラス越しに見えた。

あのシルクハットも目に入る。

会長は部室の扉を開ける。

「失礼するよ」

中には、月夜野、アキラ、コルカ……そして諸星がいて、生徒達は楽しげにお茶を飲みながら談笑している。

「ちょっと、なんで君がいるのさ！」

「あ、卯月先輩……」

諸星がニコリと卯月にほほ笑む。

「これは……」

驚く赤井達生徒会役員。

「僕、紅茶倶楽部に入部しようかと思って……。シュテルナーは他の活動と重複禁止だけど、でも、シュテルナーに入らずただの部活の掛け持ちならしても大丈夫なんですよ？」

諸星が言う。

「諸星は、今日から紅茶倶楽部の部員になったのさ。君みたいなかわいい下級生が部員になってくれるなら本当おれ達大歓迎だよ」

「アキラ先輩……」

アキラと諸星は見つめ合っている。

「ちょっと、僕がいない間に何やってるんだよ！　　どういうことなの？」

レンが慌てて二人の間に入った。

「よく言うよ、お前、自分で出て行ったんだろうが」

「そ、それはそうだけど……」

「シュテルナーのメンバーになるには他の部活動は出来ないんです。僕は演劇部を続けたかったので辞退しました」

と諸星。

「まあ、とはいえ断れば今後の学園生活不利にはなるな」

月夜野が誰とも眼を合わさずに言う。

「それはいいんです、僕だけのことで済む話ですから。でも……一生懸命頑張って活動している部活を潰すために卯月先輩のことを利用したって言うなら許せません」

「ちょ、僕、利用されたの？」

レンは驚く。

「そうです。僕の兄さん、今は売れない絵描き兼美大生ですが、高校まではこの生徒だったんです。五年前の話聞きました……新入生の時の赤井先輩は、女の子みたいに綺麗で上級生から人気があったそうです。多くの上級生が赤井先輩にアタックしたけど、先輩は誰にもなびかなくて……でも先輩はまだ大学生だった月夜野先生のところには何度も会いに行ってたって。先輩、気づかなかったかもしれませんが、先輩は人気があったから、動向観察している人多かったらしいですよ。先生が就任してからは時々紅茶倶楽部ものぞきに來ていたって……。僕の兄さんも昔、この倶楽部の部員だったんです」

「えっ、そうだったの？」

アキラが月夜野に聞いた。

「そういえば、そうだったかな」

「赤井先輩のこと何度か見かけたって兄は言っていました。先輩……月夜野先生のことを好きなんでしょう!？」

「「「ええっ」」」

思わず、レン達の声が被る。

「……………」

「人のことを一途に好きなのって、素敵なことだと思います。でも、こんなやり方間違っていますよ！」

「くそっ」

赤井は呻く。

「ちょっとちょっと、これまづい空気なんじゃない……」

「さ、流星に大勢の前で好きな人をバラされるのはきついな……」

小声でレンとアキラが話す。

「僕、今日この紅茶倶楽部に入部しました。だから、部員は三名。この倶楽部はまだ潰されないはずです」

諸星が言いきった後、ボタンと部室の扉が開いた。

「ちわっす、頼まれたもの持ってきたぜ、センセ」

そこへ焼き菓子を持ってきた流星が現れる。

「あれ、君……久しぶりだな」

赤井は、ギロッと流星をにらんだ。

「こんな地味な奴や、そっちの落ちこぼれがOKで、俺がだめなんて許せない!!」

赤井は怒りをあらわにしながら言う。

「地味って……俺のことか……」

流星は少々ショックを受けているようだ。

「こんな屈辱……今度の生徒総会は覚悟しておけよ、月夜野!!」

そう捨て台詞を吐くと、赤井は足早に去って行った。お伴の二人も、慌てて赤井の後を追う。

「良いところに來たな流星。さ、菓子も到着したことだし、お茶を淹れ直すか」

「なんだ、どうした……何かあったのか？」

流星はまだ何が起きていたのか理解できないようだった。

「うーん、みんな流星のお菓子を待ってたんだよ」

場の空気など気にもせず、コルカが無邪気に答える。

「いや、そうは見えないんだけど……」

「そういえば、流星さんも附属生の時は紅茶倶楽部だったの？」

アキラが聞く。

「ああ、最終学年の一年間だけな。そういやあの赤毛、よく部室に来ていたな。でも、いたいけな少年をこの教師の餌食にしたらかわいそうだろう。だから別の部活にした方がいいって帰してたんだけど……」

「やっぱり、月夜野に会いに来ていたって本当だったんだ。げー、あんな何もしないでモテそうなのに、なんでわざわざこんな奴のこと……」

ゴンッと月夜野がアキラの頭をこぶしで打つ。

「こんな奴とはなんだ」

「いて一な！ 暴力教師!!」

「ゴメンナサイ、僕が余計ややこしくしてしまったみたいで……」

諸星はしゅんとなりみんなに謝る。

「いいよ、諸星は悪くないって。進学に有利とか言ってさっさとサインした薄情な奴だってここにいるんだから……」

「むっ、それ僕のこと!？」

とレン。

「他に誰がいるんだよ」

「僕だってもう、あんな活動抜けるよ。毎日掃除やらなんやらさせられて、体よく雑用に使ってくれちゃって、ちょっと腹が立ってたんだ」

「しかし、卯月はサインしてしまったのだろう。だとするとシュテルナーからは抜られないな」と、月夜野はボソリと言った。

「ええっ、先生アイツ等の味方するんですか？」

「そうじゃないが、この学園は生徒の自主性を重んじるからな。生徒が作った契約なら、教師や大人が入って無効にするのは難しい」

「そんなあ……」

「そういや、月末、生徒総会なんだろ？　そこで議題に上げてみたらどうだ。俺が附属生だった時も、総会で議題に上がって変わった校則や行事がいくつかあったぞ」

流星はレンにそう助言する。

「けど、相手は生徒会だよ。総会だって彼らが仕切ってるんでしょ」

「まあ、でも、レンがあそこから抜きたいならやるしかないんじゃないか？　それに……」

「あの赤毛が腹を立てているのは、あくまでも俺に対してだからな」

月夜野が言った。

※

生徒総会の当日。午後の授業を繰り上げ中部、高等部の生徒全員が講堂に集められていた。
「それでは、各委員会からの報告がおわったところで、ここから全校生徒から意見を受け付ける。
何か議題に上げたい生徒は挙手を」

「はいっ！」

真っ先にレンが手を挙げる。そのあと、生徒が数名手を挙げはじめた。

「その高等部の一年」

赤井はレンを無視して別の生徒を指す。

「ちょっと、明らかに僕の方が手を挙げるのが早かったのに」

レンは小声で言う。

「まあ、相手は生徒会だからな……。簡単にはいかないよ」

と、アキラ。

赤井に指された高等部の生徒は、立ち上がって話し始める。

「ある教師に関して疑問があります。月夜野先生は、何故室内で帽子をかぶっているのですか？

一般常識やマナーとしても、我々学生の見本となるべき教師がおかしいと思います」

「確かに、君の言うことはもっともだ。月夜野先生、その帽子を取ってはいただけませんか？」

「それは出来ないな」

講堂の一番後ろに寄りかかっていた月夜野が答えた。

「何故ですか？ おかしくないですか帽子が取れないなんて……。おかしいと思うものは挙手を」

半数以上の生徒が手を挙げる。

「先生、その帽子を取ってください」

「ちょっと待って!! そんな帽子なんかのことよりもっと大重要な議題があるよ!!」

レンは立ち上がって叫ぶ。先ほどの挙手をスルーされたことがよほど腹立たしかったようだ。

「そこ、勝手に喋りはじめない」

「だって、本当にあんな教師の帽子のことなんてどうでもいいもの。それより、会長、いや会長
達生徒会役員は、あの生徒会室を私物化しているでしょう？」

周りがざわつく……。

「ちっ」

赤井は小さく舌打ちをした。

「私物化と言うならあの教師だって、部室を私物化してるんじゃないのか」

「そんなことない逆だよー。僕達が手に入れられないようなカップを持ってきて僕らに使わせて
くれるんだから……」

「そうです、あなた達はあの奥の部屋を解放しないですよ？ 何に使っているんですか？」

コルカや一年の諸星も応戦する。

「今、その議題ではないだろう」

赤井は壇上から言う。

「それに、シュテルナーだっておかしい。あんな訳のわからない誓約書を書かせて。しかもまるで、いいことだらけみたいに言って……」

と、レン。

「でも、君達は納得してサインしたんだ。そうだろう？　だがあの教師が帽子を取らないのは、誰が見たっておかしいことだ」

赤井は譲らない。

「ハイハイハイハイッ」

拳手のつもりか松葉杖を高く挙げている生徒がいる。

「なんだ……」

赤井は、その生徒に視線を向ける。

「中等部の二年か……？　どうした？」

「ハイハイッ」

立ち上がると全身包帯だらけだ。

「この学校には決闘の慣わしがあるのを会長はご存知ですか？」

「ああ、解決がつかない問題はフェンシングで対決し、その結果で決めるという……」

「今回の騒動は、あなたと先生の痴情のもつれだということは全校生徒が周知していますよ。噂が広まるのはあつという間ですから。どうです、なら、いっそ決闘してみては？」

あからさまな物言いに赤井は一瞬眉をひそめたが、すぐに何やら思いついたように、細い指で顎をさすった。

「確かに、この学校の伝統に則って、フェンシングで決めるのはいいかもしれない。先生どうですか？」

赤井は、月夜野に向かって言う。

「フェンシングって……会長、確か大会で優勝してことあるんだよね？　流石に不利なんじゃない??」

レンが傍らのアキラに言う。

「いや、どうだろうな、アイツのことだからふえんしんぐぐらい出来るんじゃないの？」

「む、なんやかんや、先生のこと認めちゃってるよね、アキラって」

「なんだよ、別にそんなんじゃないぜ」

「いいだろう」

月夜野が言う。

そして、月夜野が壇上に上がると生徒達がざわついた。

先ほどの包帯ぐるぐる巻きの生徒が、アキラ達の隣に座って言う。

「七年ぶりの学園での決闘だよ。見物じゃないか」

「七年前って……その学年章、君、俺達と同じ学年だろ」

包帯の生徒は、興味津々という様子でレンを見た。レンが反射的にスウェーバックしてしまうほど、顔が近い。

「な、何？」

「ああ、よく見れば君はあの子のお気に入りか。ふむ、確かにあの子が好むタイプだな。せっかくの自分の容姿をわかってないでぞんざいに扱っているところなんか、あの子の好みそのままだ」

「はあ？」

「フェンシングは、フルーレ、エペ、サーブルの三種目あるが、星月学園の決闘の形式ではフルーレのみ行う」

壇上には、二本のサーブルが用意される。

赤井と月夜野はそれぞれ剣を手にする。

紺野が審判役を買って出た。

紺野が「アンガルド」と言うと、二人は剣を構える。講堂に緊張感が走る。

二人の準備が整うと、「アレ」と試合開始の合図があり、赤井が勢いよく月夜野に向かって飛び出した。

最初は赤井が優勢に見えた。月夜野は受け身に徹している。しばらく膠着状態が続いた。

次第に、赤井に疲れが見えてきた。赤井が最後の力を振り絞って月夜野に一撃を繰り出そうとした時……。

月夜野が赤井のサーブルをはじく。

サーブルは赤井の手を離れて壇上の下に落ちた。

赤井はその場にへたり込む。

「煙草を吸っているだろう？ だから体力も衰えているし、味覚も鈍感になっている」

月夜野は赤井の目の前にやってくると、彼にしか聞こえないくらいの小さな声でそう言った。

「くそっ」

「俺の勝ちだ。あの部屋を開放するんだな」

紺野と臼井が赤井にそばにやってくる。

「一人の人間に執着するなど馬鹿馬鹿しいことだ。たまには隣にいる奴のことも振り返ってやれ。でないとお前ら、ずっと一方通行のままだぞ」

と月夜野は言い、壇上を下り講堂を出て行こうとする。去り際、あの包帯をぐるぐる巻きにした少年の横を通る。



「君がそれを言うとはね。君こそ一途に“彼”のことしか考えていないんだろう？」

「ふう、あなたもこんなところで油を売っている暇があるんですか？」

そう言うと、少年は面白そうに小さく笑った。

「たまにはね息抜きしないと。しかし、慌ててボディを用意したので足の螺子が緩んでいたようだ。帰りに流星君のところに寄って行こう」

「……………」

少年は、そのまま講堂を出て行った。

※

レン、アキラ、コルカ、諸星は、はじめて生徒会準備室に足を踏み入れる。月夜野も一緒だ。準備室には、赤井、紺野、臼井がいた。

「うわ、この中ってこんなになっていたのか……」

と、レンは言った。

「骨の標本……みたいなのがいっぱいあるな」

アキラが言うように、部屋の中にはおびただしい数の動物の骨格標本がある。

「それは全部、紺野が作ったのさ」

「紺野副会長が？」

レンがまじまじと紺野を見る。紺野はレンをぎろりとにらみ返した。

部屋の隅の方にブリキで出来た筒状の装置がある。

「これ、なんだろう？」

コルカが聞く。

「も、もしかしてこれで動物を焼いて標本をつくっていたとか？」

「まあ、半分正解だな。それは燻製機だ」

「燻製機？」

「紺野はそこで豚足やら手羽先やらを燻製にして、いらなくなった骨で標本をつくってるのさ」

「うわ……シュテルナーとか言っていた生徒会が手羽先や豚足の燻製作りなんて……」

レンは啞然とする。

「でも、標本の中にはネズミとか蝙蝠とか……食べられないものもあるみたいだけど……これも紺野先輩が作ったんですか？」

アキラは紺野にそう聞く。

「……………」

紺野は答えない。

「こいつ、会話らしい会話は俺としかしないから話しかけても無駄だぜ」
赤井が言う。
「そういえば……シュテルナーの活動していた時も、紺野先輩はにらんでくるばかりでほとんど話をしなかったな」
レンは改めて今までの紺野と自分のやり取りを振り返る。
「そっちの標本も紺野が作ったんだ。燻製と引き換えに動物の死体をもらってきてね。紺野の燻製は結構評判いいんだよ」
「げー、死体……」
「ネズミとかは動物実験している大学生から、鳥や蝙蝠は清掃員や月に一度やってくる庭師とかからね」
赤井が説明した。
「うわー、なんか全然シュテルナーのイメージと遠い……」
「死体は気持ち悪いけど……そういうことも必要なんじゃないですか？ 生物学的な見地とかからしたら??」
と諸星。

「まあ、紺野は医者の子だからな。そういうのも必要かもしれない。とはいえ流石に生徒会のメンバーが夜な夜な動物の死体と向き合って標本作りしているなんてイメージ悪いだろ。食用のものはいいけど、動物の死体を解体するのは結構えぐいよ」
「だから隠していたのか」
ここではじめて月夜野が口を開いた。
「大学生達と取引するときは紺野のシンパの下級生を遣いに出させた。彼らは紺野に心酔していたから喜んでやっていたよ」
「そうやってこんなに骨をため込んだんだな」
「そうさ、悪かったな。この通り準備室は俺達が私物化していた。標本は紺野の実家におくらせるか捨てさせるかするよ」
「いや、いいんじゃないか。ここに置いておけば」
「えっ、しかし……」
月夜野の返事に赤井は戸惑う。

「そうですよ、先輩。おれ、セレブお茶会みたいなのには全く興味ないけど、この骨格標本はなかなかいいと思う。絵に描かせて欲しい」とアキラは言った。
「君……けど、先生は俺達をここから追い出したくて俺と決闘したんじゃないのか」
「誰も追い出すとは言っていない。開かずの間にしているではなく開放しろと言っただけだ。中もそのままでもいいんじゃないか」
「月夜野……」

結局、シュテルナーの制度はなくなった。
生徒会室とその準備室は常に開放されることになった。

※

……一週間後。
「先輩、今日はこの骨を借りて行ってもいいですか？」
「まさか、君がこの部屋に入り浸るようになるとはね」
赤井が言う。
生徒会室には、赤井とアキラがいた。アキラは準備室で絵をかくモチーフにと骨格標本を物色しているようだ。
「あ、すみませんしよっちゅう来ちゃって。生徒会の仕事の邪魔にはならないようにしますから」

アキラが棚をいじっていると、はらりと写真が一枚落ちた。

中等部の制服を着た赤井と紺野の写真だった。

「うわ、これ、先輩ですかっ!？」

アキラは驚いて、それを赤井に見せた。

「それは入学したての頃に撮った写真だな」

「か、かわいい……本当に女の子みたいだったんだ。おれ、この先輩とだったら付き合ってもいいっす」

赤井はアキラをじいっと見ている。

「はあ、しかし、白蛇はなんでこんなのが好みなんだ」

赤井は大きなため息をつく。

「あの、もしかしてこんなのっておれのことですか？」

「本当だよ、あの子ときたら……相変わらず天然ものが好きなんだからね」

いつの間にかアキラの隣に、あの生徒総会で包帯ぐるぐる巻きだった少年が立っており、そうつぶやいた。

「うわっ、吃驚した」

「君、生徒会室も準備室も一般生徒に開放はしているけど、ノックくらいはしろ」

赤井は包帯少年に注意をする。

「フフフ……」

「お、お前、誰なの？」

「おっと失礼、中等部二年の観月ヨルといいます。よろしく」

それだけ言うと、彼はアキラと無理やり握手をし去って行った。

「二年なら君と同じ学年だろ。知らないのか？」

「うーん、あんなやついたかな」

包帯少年と入れ替わってレンとコルカがやってくる。

「アキラ、こんなとこで何してんのさ。もうすぐ部活だよ」

「げげ……おれ、あのまま紅茶倶楽部廃部にしてもらったほうがよかったかな……」

「もう、何言ってるんだよ。そんなこと言って、どうせ本当に廃部になったら嫌なんですよ。早く行くよ」

「そうだ、赤井先輩もせっかくだから一緒に部活にきたらどうですか？」

「……やめておくよ、君達が白蛇とキャッキャウフフしているのを見せつけられるのは御免だ」

「キャッキャウフフって……」

「ほら、アキラ、早くいかないと先生に怒られちゃうよ」

そうレンが言うと三人はバタバタと生徒会準備室を後にした。

「ふう、俺達もお茶の時間とするか、紺野、臼井」

赤井がそう声をかけると、どこからともなく二人が姿を現した。

おしまい。

Luno Teo ～生徒会編 #003～

<http://p.booklog.jp/book/60994>

著者：Luno Teo

イラスト：椿春雨・D i t e

協力：七海鳴

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60994>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60994>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ